

昭和56年度
(1981)
第21回大会

男子優勝 札幌藻岩 女子優勝 札幌清田

【 専門委員長 寸評 】

団体戦は昨年同様、男子は札幌藻岩の5連覇、女子は札幌清田の2連覇に終わった。両校の生徒の努力、監督の先生に熱意に敬意を表したい。

男子は、ライバル校である札幌清田、当番校としての名誉をかけた函館ラ・サール、それに進境著しい旭川東などがどのように藻岩に挑戦するかが興味の的であったが、旭川東ダブルスに善戦するも及ばず、期待は函館ラ・サール、札幌清田の戦いに持ちこされた。ラ・サールは高水・小林らがよく健闘1-1にもつれ込んだが、わずかに及ばず、札幌清田が決勝に進出。清田は準決勝の苦闘を身体に残しつつも、ダブルスに1勝を上げ、勝負はシングルス2にかけられてきた。長いラリーの応酬の結果、疲労の出てきた中山のボールが短くなり、結局、力でおし切った藻岩の5連勝なる。

女子は清田と藻岩の争い、清田の鈴木が意外にも不調で、一方的に川原にとられ、シングルス2の決戦となった。清田の佐藤は責任の重さに委縮したのかボールに伸びがなく、藻岩阿部のくせのあるドライブが威力を発揮し、一時は藻岩が優位に立ったが、佐藤よくしのぎ、タイブレークの末辛くも清田の優勝となる。

個人戦はダブルスは奥村・嶋田（札幌藻岩）、女子では佐々木・佐藤（札幌清田）の圧倒的強さが目立ち、またシングルスでも、奥村（札幌藻岩）の強さは群を抜いていた。まだ2年生で未完成の部分も多いが、まだまだこれから伸びる選手である。

他に目立った選手として、地元でよく善戦した野村、高木（函館ラ・サール）、また旭川東の折笠、須貝があげられる。また、函館ラ・サールの小林、勝ち運にこそめぐまれなかったが、堂々としたプレーをした沖田（滝川）など、札幌以外にも良い選手があらわれてきた。女子も同様で、地元函女商の藤田、旭川北の川嶋など、経験を積めばもっと強くなるだろう。若手のホープとしては札幌静修の土佐がいる。国体代表としてのキャリアがあるが、もう少し緩急を心得てほしい。全国的にも通用させたい選手である。

最後に、本大会はコートの関係者から駒ヶ岳の麓、大沼の民営コートを利用したが、それだけに関係者の苦労は並々ならぬものがあつた。当番校の函館ラ・サールの先生は勿論

のこと、宿舎の手配、大会の運営などに十分な協力体制のもと、組織的に動いて頂いた、函館地区の庭球部関係の先生や函館協会の関係者の努力には頭の下がるものがあった。立派な大会であったことを喜ぶとともに関係者に厚く感謝の意を表したい。

【全国大会】

藻岩が2度目のベスト8入りを果たした。昨年女子にひき続き、3年連続で本道はベスト8を占めたことになる。選手、監督の努力をたたえとともに、本道高校庭球界の充実を喜びたい。とくに奥村の活躍は立派なもので、個人戦単複にも力を出し、来年度が期待される。

今年度目についてのは、3セットマッチの場合、第1セットをとりながら、2、3セット目で取り返されるケースが多かったことである。本道では日程の関係で1セットの試合しかできないための現象かとも考えられるが、3セットマッチでの精神の集中、配分などの研究が今後の課題となろう。

(専門委員長 亀山 省吾)

優勝のよろこび

男子 札幌藻岩高等学校

我々は、先輩が築いてくれたものを、今ここで終わらせたくない、終わらせてはいけな
いと、そう思いながら、全道大会5連覇を目標に、6月14日の全道大会に向けて顧問の
先生を含み、みんなでつらい練習をしてきました。

6月14日、みんな最後の高校生活、悔いの残らない試合にしようと、全員が一丸と
なって、一試合ごとに全力を出して頑張りました。

そして決勝戦では、ダブルスを落としながらもシングルス1と2が奮起し、勝ってくれ
たおかげで、危ういながらも、念願の5連覇を達成することができました。

しかし、この優勝はわれわれの力だけでは絶対に無理だったに違いありません。顧問の
先生をはじめ、他の多くの人々の協力が合ったからこそ、成し遂げることができたのだと
信じています。顧問の先生には、部活動で、技術的な面でたくさんの事を、教えていただ
きました。また、部活動を離れた時も、いろいろと指導して下さったり、教えて下さいま
した。我々は、このクラブを続けてきて、優勝することの難しさと、喜びと、目標をもつ
ことの大切さを知りました。そしてみんなで汗を流して頑張ってきたこの2年半を我々は
意義あるものとして、決して忘れないでしょう。

(札幌藻岩高等学校 主将 梅沢 勝寛)

優勝のよろこび

女子 札幌清田高等学校

勝つこと、優勝することは、スポーツ選手ならほとんどの人が持つ一つの目標だと思
います。私は3年間硬式庭球部に所属していました。テニスと聞くと、バレーボールやラグ

ビーなどの団体競技と比べて個人競技の性格が強く感じられます。でも、実際に練習や試合の中で私が感じたことは、テニスは部員全体の気持ちがひとつになれば勝てない団体競技であり、自分一人の勝敗などそれほど大きな意味のないものだったということです。ですから、夏のインターハイの団体2連覇、秋の新人戦の団体4連覇は、部員全員が力を合わせて手にしたものなのです。

優勝した時はとても嬉しくて今までの苦しかったことや悲しかったことを忘れて、涙を流しながら感激しました。けれども、その喜びもつかの間で、次の瞬間からは他の者に追われるという以前よりずっと苦しい立場になるのです。

でも私達は、一人一人の励ましと団結でそれを克服してきました。

試合が近くなると、ボール拾いをしている人も、試合に出たいという自分の気持ちを抑えて励ましの声をかけてくれ、コートでボールを打っている人も、ボール拾いをしている人達の方まで頑張って練習するようになり、部員の気持ちが一つになっていました。それだからこそ試合で勝った時の喜びも大きいものであり、優勝のたびに部の団結がより一層強いものになって行きました。優勝の喜び以上に苦しい練習の3年間で私が得たものは、団結という大きな力だと確信しています。

(札幌清田高等学校 主将 鈴木美恵子)

全国高校総体 (第71回全国高等学校庭球選手権大会) 千葉

8月3日～9日 千葉県総合運動場庭球場